

(2) 教育計画

①校内研究計画

1. 研究の主題

「自ら進んで学習する児童を育てる算数科指導の研究」

～伝え合う力を育む授業をめざして～

2. 主題設定の理由

・社会的要請から

今日、科学技術の発展や情報化・国際化の進展など急速な社会の変化の中で21世紀をたくましく生き抜いていける子どもの育成が求められている。そのためには、将来の基盤となる基本的な生活習慣・学習習慣の育成と、基礎的・基本的な内容の確実な定着や学ぶ意欲、自ら考える力などの「確かな学力」の育成が求められている。また、平成20年3月には学習指導要領が改訂となり、さらなる理数教育の充実が盛り込まれた。

そのため、学校においては新学習指導要領の理念やねらいに沿って、子どもたちに基礎的・基本的な知識・技能の定着を図るとともに、自ら考え、自ら学び、主体的に判断する「生きる力」を構築するために創意工夫した教育活動を行っていかねばならない。

・児童の実態から

高学年の全国学力調査や全学年実施したCRTの結果をみると、ほとんどの学年で全国平均を上回っていた。また、本校の課題の一つである「①主体的に学習に取り組もうとする意欲を高めること」について、児童の実態にあった発表の場の工夫や課題意識もてるような導入の工夫などに力を入れた結果、児童の約八割以上が算数が好きとアンケートで答えている。

もう一つの課題の「②コミュニケーション力（伝え合う力）の向上」については、児童一人一人がホワイトボードを持ち、それに自分の考えをまとめ、発表する形をとって見たところ、喜んで発表するようになってきた。

しかし、算数の時間の全体での発表に関しては、「進んで発表するようになった。」と答えた子どもは、まだ全体の約半数であった。

そこで、本年度は、算数科のみならず、他の教科でも伝え合う場の設定を工夫したり、全校朝会や集会、読み聞かせでの感想の発表などの機会を増やしたりすることを進めていきたいと考える。ここでは、同時に、聞き手も育てることも大切であり、そのためのよい聞き手の具体的な姿勢や反応の仕方等も、全学年で共通して取り組んでいく必要がある。

3 研究の目標

子ども一人一人が主体的に考え、「分かった」「できた」と感じ、分かったことをお互いに「伝え合う力」を育む。

4 研究の仮説

自ら進んで学習する児童を育てるために、以下の点について指導の工夫、改善、支援を行えば、学習が主体的になり、「伝え合う力」が身に付くだろう。

- ① 単元についての研究（構造的・系統的・よさをふまえて・導入）の工夫
- ② 発達段階や単元などの学習内容に応じた「伝え合い活動」の工夫（一人一枚のホワイトボード活用）
- ③ 聞き手を育てる指導の工夫（聞くときのキーワードなど）
- ④ 効果的な自己評価活動（振り返り）の研究

5 研究の内容

- ① 課題意識をもたせるような導入の工夫、教材・教具の工夫
- ② お互いの考えを伝え合う場の工夫
- ③ 全体で発表し合う場の工夫
- ④ 効果的な自己評価活動の取り上げ方

6 育てたい児童像

- ① 既習事項や既有経験に基づき、進んで課題を解決しようとする子ども
- ② 自分の考えを進んで表現しようとする子ども
- ③ 友だちの考えをよく聞き、自分の考えに生かそうとする子ども
- ④ 見いだした解決方法や結果を振り返り、自己評価できる子ども

☆今年度は、特に②と③に力を入れていきたい。

7 研究組織

- ・低学年グループ・・・今坂・横尾・大西
- ・中学年グループ・・・山口・池田・校長
- ・高学年グループ・・・中原・光武・教頭・林

8 研究主題の考え方

- ・自ら進んで学習する児童とは

強い課題意識に支えられながら、主体的に考え、活動し、価値ある数理を見つけ出していける児童

- ・そのためには

「数学的思考方」を大切に「考える力」を育て、考えたことを自分なりの言葉で「伝え合う」指導の工夫を中心にした研究をする必要がある。

- ・「考える力」とは

- ① 課題を自分のものとして受け止め、進んで考えようとする力
- ② 既習事項と関連させて、予想を立て、見通しを持って取り組む力
- ③ 自力解決した考えを友だちに伝える力
- ④ 友だちの考えをよく聞き、自分の考えと比べ、言葉で反応を返す力
- ⑤ 解決の喜びを次の課題追求に生かそうとする力